第二回新邪馬台国サミットレジメ　　岡將男

はじめに

昨年の新邪馬台国サミットでコージネーターを仰せつかったことがきっかけで、今回「吉備邪馬台国東遷説」を発表させていただくことになった。

私は邪馬台国時代の考古学、文献については 40 年前からずっと目を通してきたが、文献は『魏志倭人伝』『日本書紀』『古事記』のみ、楯築遺跡も発掘されておらず、とても邪馬台国所在論は論じられないと思った。一方、雄略天皇時代は考古学的新発見もあり、21 年前に小説という形で発表した。

六年前、近重博義さんから「吉備邪馬台国説を一緒にやろう」と言われ、広畠輝治さんと若井正一さんの邪馬台国吉備説を読み、「狗奴国=大和朝廷」を確信した。吉備の特殊器台の展開や楯築遺跡の発掘等の考古学の成果から、古墳時代直前の吉備の存在が無視できないなっていた。ただ両氏の説では特殊器台が大和の初期巨大前方後円墳に採用された経緯が説明できないと考えた。

邪馬台国東遷説はこの疑問への回答として昨年に発案した。倭国の歴史は三国志の一部であり、卑弥呼は魏の意志によって死を賜り、後継者の臺與が吉備から大和に東遷したと考えたのである。

前回のサミットを契機所有全文献を再読、山陰の遺跡見学。山陰、近江、丹波、阿波、播磨、讃岐等の遺跡や神社についても再検討する必要があると感じた。前回サミット後の『卑弥呼は近江か出雲か吉備か』（テレビせとうち 2013 年）で、吉備邪馬台国東遷説の可能性について初めて論評した。今回第二回「吉備邪馬台国東遷説」を出版しようと決意、章立てをしたところで胃ガンが判明、病院に 10 冊ほどの書籍を持込み、手術 1 週間後から 30 日で中心部分を書き上げることができた。

吉備邪馬台国説への賛同

戦後の文献史学では、『日本書紀』『古事記』が皇国史観の代表の様に扱われ、記紀の記述は少なくとも崇神天皇以前はすべて架空のものであり、始祖王・神武天皇の存在は否定しないものの、そのあとの 8 人の天皇は実在しないという「欠史八代」を当然と考えている。だから 7 代孝霊天皇の所にある吉備津彦の吉備制圧の部分は完全に無視されている。吉備説を唱える事は、従来の文献史学、考古学の根幹をゆるがすことになるので、吉備邪馬台国説は唱える事ができなかった。考古学の方でも、文献史学の欠史八代を前提にしている。最近では纒向遺跡を邪馬台国の王都、箸墓古墳を卑弥呼の墓と半ば強引に誘導され、この数年は異様な程の報道がされ。一方で九州説の安本美典氏が季刊『邪馬台国』で科学的と称する年輪年代法の評価を巡って逆襲している状況である。

広畠氏、若井氏の吉備邪馬台国説は、「欠史八代」では無視されてきた『古事記』の７代孝霊天皇の段を史実ととらえたところに目新しさがあった。確かに２代から９代の天皇は直系男子で構成され、系譜のみでほとんど事績らしいものはない。しかし『古事記』７代孝霊天皇の段で以下の文章が出てくる。

「孝霊天皇の皇子、大吉備津彦命（五十狭芹彦命）と異母弟若建吉備津日子命は、針間（播磨）の氷河（加古川か）の前において、忌瓮を据えて、針間を道の口（入口）として以て吉備の国を言向けやわしたまいき」

吉備を邪馬台国と考え、大和を狗奴国と考えれば、吉備邪馬台国を大和狗奴国が制圧して、大和朝廷が成立したことをうまく説明できる。欠史八代の中でも、吉備津彦が吉備に派遣されたことだけが語られている意味は大きい。吉備津彦の吉備制圧は大和朝廷にとって大事件だったことを示しているのではないか。一方で、『日本書紀』にはこの記事は見られず、邪馬台国についても 100 年ほどずれる神功皇后に関連して引用されるのみだ。これは『日本書紀』編纂者は『魏志倭人伝』を無視できなかった。

一方、吉備の神話とも考えうる温羅伝説が残っていることも興味深い。吉備津彦はさらに崇神天皇代に西海道・出雲の制圧。吉備津彦が一代だったとは思われないが、大和が吉備を制圧したことは間違いないが、完全な軍事的制圧ではない。広畠氏、若井氏の邪馬台国吉備説に立った上で論考を進める。

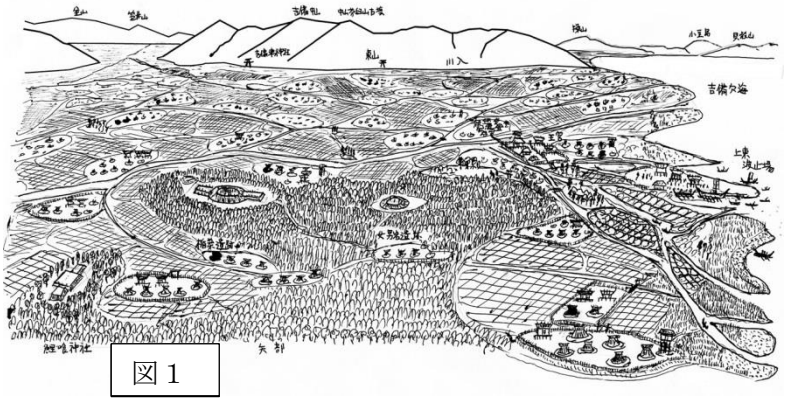


図１

特殊器台と楯築遺跡の意味

吉備邪馬台国説は、岡山大学考古学教室の近藤義郎による倉敷市の楯築遺跡の発掘以来の、特殊器台の評価と箸墓古墳からも出土したなど、考古学の成果によって語られるようになった　弥生墳丘墓・楯築遺跡は吉備の穴海という児島との間の海の北岸に位置する、海抜４０ｍの一連の丘陵全体から言えば北の端に当たる位置にある。東に「吉備津彦御陵（中山茶臼山古墳）」のある吉備の中山を望み、吉備津神社を遠望する事ができる。（図１楯築周辺図・作図岡將男）

楯築遺跡のすぐ南、山陽新幹線付近は上東遺跡と呼ばれ、柳瀬昭彦氏の吉備考古ライブラリー『吉備の弥生集落』（吉備人出版 2007 年）によれば、弥生時代としては国内二例目の船着き場と思われる突堤状遺構が発見された。土器だまりからは千個体以上の弥生土器が発見され、「船の航海安全を祈願する儀礼行為があったことも予想される」という。中国王莽時代の「貨泉」が１枚出土し、連続絵画のある小形鉢があり、絵画は刺青をしたシャーマン、怒った顔の悪霊、万能の神の象徴としての龍、蝶を捕獲するカマキリに見える。柳瀬は「シャーマンが悪霊を取り除くために、万能の神である竜と脅威でもある自然界（の生き物）に対して祈り、安全や平穏を願った」のではないかと言う。「国際貿易港としての楯築・上東」の性格を如実に示している遺物ではないだろうか。

楯築遺跡と東の吉備中山との間には足守川が流れているが、高梁川の分流も流れていた。矢部南向遺跡、足守川加茂遺跡、加茂政所遺跡、津寺遺跡など１０以上の弥生時代の住居遺跡が存在し、南北は３ｋｍにも及ぶ全国的にも有数の巨大弥生後期遺跡群である。吉備の中山までの東西は２ｋｍもあることから周囲１０ｋｍにもおよぶ巨大集落群だった可能性さえある。佐賀県吉野ケ里遺跡をはるかにしのぐ規模なのである。鳥取県妻木晩田遺跡なども、吉野ヶ里遺跡より巨大なのだ。楯築遺跡周辺は、少なくとも日本最大級の弥生時代後期集落であったことは間違いない。北方の総社市高塚遺跡からは王莽の新の時代（1 世紀）の「貨泉」が一度に２５枚も出土して、全国の出土数２０枚程を上回った。中国との直接交易想像させる。高塚遺跡からは突線流水紋銅鐸や棒状鉄製品も出土している。

楯築弥生墳丘墓について簡単に述べておく。墳丘部は直径約４０ｍ、高さ約５ｍの円丘部に北東・南西側にそれぞれ方形の突出部を持っている。全長は８０ｍにも及ぶ可能性があり同時期の弥生墳丘墓としては日本最大級である。頂上には１個の中心巨石、東西南北に４個の巨石が立てられでいる。近藤義郎氏は弥生墳丘墓と同時に建てられたと推定するが、一方薬師寺慎一氏は元々祭祀の場であったと推論する。斜面には２列の高さ１ｍほどの列石が２０個ほど残っている。遺跡の突出部はかなり破壊されているが、南西部突出部は長さ２２ｍほどで、高さは２ｍ。円丘部と突出部の接続点付近の石積みはかなりはっきり残っていた。円丘と突出部が一連の物であることが、二重三重の円礫で確認された。

中央巨石と南側巨石は間隔があり、中心埋葬主体が発見された。木棺と木槨という二重棺的な組み合わせは中国本土や楽浪郡の影響が強いとされる。棺の底には３２ｋｇという大量の朱が敷かれており『魏志倭人伝』の記述で卑弥呼が朱を好んだことを思い起こさせる。副葬品は鉄剣１本、首飾り２本、ガラス玉と小管玉が出土と意外なほど少ない。

中心主体の上の土には円礫堆があり、その中から砕かれた弧帯文石が発見された。楯築神社のご神体の弧帯文石の縮小版であることから、逆に楯築神社のご神体が弥生墳丘墓の頃のもの分かった。円礫堆には管玉型土製品や、砕かれた勾玉型土製品、人形土製品も発見された。鏡を砕いて副葬する古墳時代の風習の原点なのだろう。墳丘上からは最古式の弧帯文の無い立坂型特殊器台が発見された。

墳丘全体からの土器は特殊器台１０前後、特殊壺１０前後、長頸壺数個、装飾器台６以上、高坏４７以上、装飾高坏１３以上、脚付小壺４７以上と多く、墳頂周辺や溝底、側面下などに片づけられていた。墳丘上で葬送が行われ、新嘗の儀式で参列者が飲食を行って、特殊器台も含めて片づけられている。吉備特殊器台が古墳の円筒埴輪の元祖であることは、考古学界の定説となっている。埴輪の起源の物語が『日本書紀』の第１１代垂仁天皇の時代にある。垂仁天皇時代には既に古墳時代に入り、埴輪もあったとの傍証にはなるが、この部分は土師氏の起源説話であって、考古学では吉備の特殊器台が円筒埴輪の元祖であるとされている。

元々器台とは「器を置く台」であって、重量があり安定の悪い大型壺をすっぽり嵌めて安定させるため、器台下部は大きく広がっていた。特殊器台はその器台が１m程度まで高さを増し、下部が少し広がったものを言い、多くは墳丘墓から出土することから、葬送儀礼専用の壺を置く器台とされる。特殊器台は墳丘墓の上に立てて置かれていたようだ。赤く丹（弁柄色素）で着色し、石張りの墳丘とのコントラストは大きい。後の赤い円筒埴輪が林立するフェンスの様に何重にも墳丘を取り囲んでいた原点は、特殊器台にあったはずである。

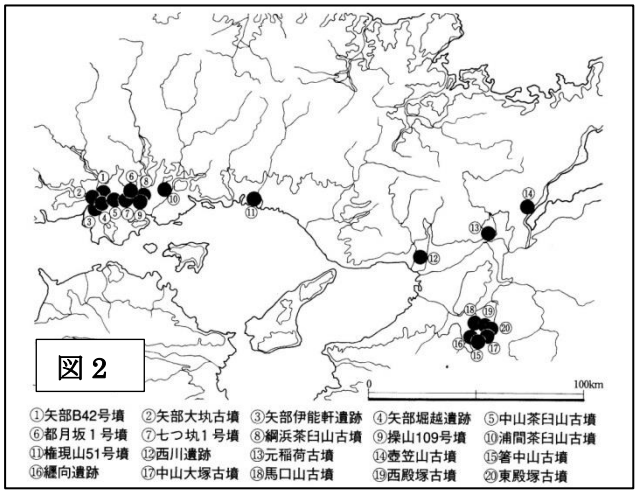


図２

吉備特殊器台には順に、立坂型、向木見型、宮山型があり楯築遺跡の特殊器台は最古式の立坂型である。立坂型には渦巻き状の文様はあるが、弧帯文はない。ところが楯築遺跡では弧帯文は弧帯文石だけにある。楯築遺跡において、特殊器台と弧帯文の組み合わせが成立し、その後弧帯文を描いた向木見型特殊器台が発生したと考えられている。立坂型は主に備中にあり、向木見型は吉備全土に波及。また立坂型は山陰の島根県出雲市の西谷三号墓からも出土。

宮山型特殊器台は、岡山県総社市三輪の宮山古墳から出土した。宮山型特殊器台は吉備では宮山と中山山塊の矢藤治山古墳でしか出土しないのに、なんと大和の初期の巨大古墳である箸墓、西殿塚古墳、中山大塚古墳などで出土している。（図２都月型特殊器台の分布図　作図・安川満、『前方後円墳と吉備・大和』近藤義郎著・吉備人出版 2001 より転載）特殊器台から、裾の広がりがなくなり、弧帯文のデザインが簡素化されたのが「都月型特殊器台型埴輪」である。下の方を地中に埋めて固定する。岡山市都月坂１号墳で最初に発見された。これも吉備と大和に集中的に出土し、海や河川に面した、吉備と大和の物流ルートに存在することが一目瞭然である。円筒埴輪はこの都月型をさらに簡略化して、手間のかかる弧帯文を廃止、赤く塗って目立たせ、林立させるため、つまり大量生産するために考案されたのだろう。最後には特殊壺も一体表現した朝顔型円筒埴輪へと発展していくのである。弧帯文を持つ都月型では、吉備と大和の特定地域にしか出土しないのに、弧帯文を捨て去って簡略化した円筒埴輪は一挙に全国に広がる、まさに特殊器台から埴輪への転換には一定の政治的転機があったはず。

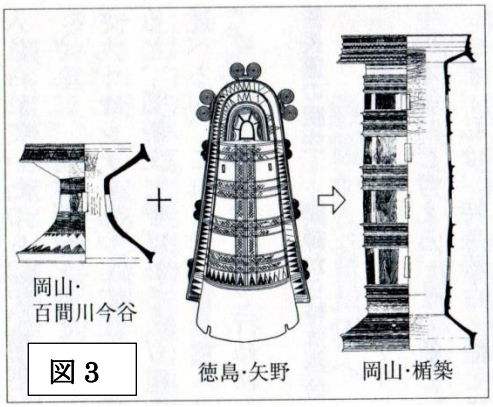


図３

特殊器台のデザインの特徴としては、上下の広がりの間には、立坂型・向木見型では５本の間帯の間に４本の文様帯が配置されており、簡素化された宮山型と都月型では４本の間帯の間に３本の文様帯が配置されている。間帯と文様帯の組み合わせや特殊器台の高さなどは、巨大化し最後に埋没された銅鐸に酷似しており、特殊器台は器台と銅鐸の合体した姿だと寺沢薫は主張するが、私もそう思う。楯築遺跡の北の高塚遺跡から最後期の銅鐸も出土しているので、楯築の主は銅鐸をも知っていたことは間違いない。（図３特殊器台・銅鐸の関係図　『日本の歴史 02 王権誕生』寺沢薫著・講談社学術文庫 2008 年）

楯築神社のご神体・亀石＝弧帯文石は一辺 93cm×22cm の四辺形、厚さ 30～35cm の角を丸めた石の全面に弧帯文を線刻してある。文様は真ん中に丸い空間のある同心円上の部分とそれが伸びて帯状になってぐるりと回るイメージで、四隅の一端に丸い顔状のものが刻印してある。全身を帯でぐるぐる巻きされた人のようでもある。楯築遺跡で銅鐸と器台が合体して特殊器台が生まれ、楯築において成立した弧帯文というデザインが次世代には特殊器台に取り入れられ、大和まで伝わった。

岡山大学の松木武彦は「特別寄稿・倭国の成立と吉備」（「平成 24 年度特別展・邪馬台国の時代－吉野ケ里から唐古・鍵、纒向まで－」公式ガイドブック）で、「吉備の楯築の主は、帥升その人とは断言できないにしても、この段階の倭国支配層の中でももっとも際立った一人であったことは疑いにくい。」と語る。楯築遺跡の年代は、発掘当時は３世紀初頭と見られていたが、現在では２世紀後半と考えられるようになった。１０７年の倭国王帥升の墓が、長生きしていれば楯築である可能性はあると思う。

『魏志倭人伝』には「その国、本は男性を王としたが、七、八十年で中断し、倭国は擾乱、互いの攻伐が何年も続くに及んで一人の女性を王として共立した。」とあり、帥升が吉備で倭国王になって７０年というと１７７年、数年倭国大乱があって卑弥呼が共立されたのが１８５年ごろというのであれば、計算は合う。吉備に倭国の中心地があったということになる。だからこそまだ確証は持てないが、倭国王である帥升＝楯築王のよって発明された弧帯文は、その後大和の箸墓に至るまで吉備邪馬台国の王家の紋章であったかもしれない。当然私が卑弥呼の後継者と考える臺與（とよ）の墓・箸墓には王家の紋章・弧帯文を刻んだ弧帯文石が埋まっていることだろう。

なお特殊器台以外の弧帯文の使用例は徳島県、香川県、吉備の矢部南向遺跡、高塚遺跡、百間川原尾島遺跡などにあり、奈良の纒向遺跡の石塚古墳周濠内からは弧文円板が出土している。

近藤義郎は楯築遺跡をあえて「楯築古墳」とせず弥生墳丘墓とした。楯築弥生墳丘墓を見てみると

１．円丘部に突出方丘部を持つ前方後円墳型の最初のもの　２．墳丘を盛り上げている

３．墳丘部に石列、石張などの崩れ防止施設がある　４．木棺直葬でなく、木ではあるが槨を持つ

５．木棺には大量の朱を用いている　６．墳丘上で首長交代の葬送儀式が行われている

７．墳丘上に埴輪のもとになった特殊器台・特殊壺を並べている

８．初期巨大古墳の特殊器台のある弧帯文の入った弧帯文石を砕いて主体部上に置いている

というように、鏡や大量の鉄器副葬以外の定型化した前方後円墳の諸要素の原型をほとんど持っているだけでなく、弧帯文石の弧帯文と特殊器台がこれ以後合体した事実は、実に重いように思う。したがって私は「古墳は楯築遺跡から始まった」と言っても過言ではないと思う。これは実は考古学界共通の認識なのだと思う。考古学者の寺沢薫は『日本の歴史０２王権誕生』（寺沢薫著・講談社学術文庫 2008 年）で、「楯築では初めて、穀霊と共同体守護霊（祖霊）の融合した霊を首長自身が身に帯び、それを増幅するための呪器として特殊器台・壺が立て並べられた。」と書く。また彼は箸墓の原型となった纒向型前方後円墳もその原型は楯築だとする。多くの考古学者もここまではほとんど異論はないのである。

楯築遺跡の存在の意味は大きい。１０７年に後漢から倭国王に認められた帥升の墓である可能性があり（帥升とする場合は、相当長生きしていないといけない。次世代の王と考えるのが合理的か）、楯築から前方後円墳がスタートし、埴輪のもとになる特殊器台を用いた祭祀が開始され、王家の紋章としての弧帯文が長く続いていき、最後に大和の箸墓にたどりつくのだ。

各氏の所論と邪馬台国東遷説

吉備邪馬台国東遷説に立って、1990 年の大和岩雄氏の『邪馬台国は二ヵ所あった』（大和書房 1990 年）を読みなおした。楯築遺跡の存在が広く知られ、纒向の発掘も進み、寺沢論文が出て、前方後円墳の成立に吉備が重要な役割を果たしたことが分かり始めたころ、大和氏は九州の邪馬台国が臺與の時代に大和の纒向に東遷して大和朝廷になったとし、「邪馬台国所在論ではほとんど欠落していた吉備について、スペースをさいて述べたように、瀬戸内海を重視すると、九州と畿内のどちらにも邪馬台国があったという視点も生まれて来て、いままで見えなかったものが見えてくる。」と書いている。また卑弥呼を共立した邪馬台国が纒向にあったとすれば「纒向遺跡は二世紀末か三世紀初頭からの遺跡でなければならない。だが、この遺跡は、どんなにさかのぼっても、白石氏(註:白石太一郎)のいう、弥生時代終末期の三世紀中葉に近い前半からであり、最盛期は、古墳が出現する三世紀後半である。だから、纒向を卑弥呼の邪馬台国の所在地とするわけにはいかない。」というのだ。さらに大和氏は従来あった東遷説が卑弥呼・臺與の邪馬台国が九州にあって四世紀に東遷して大和朝廷になったとしている事に対しては、「とすると、東遷以前からこの地で前方後円墳が築造されていた事実の説明がつかない。二五〇年初頭に東遷した台与の宮都とみれば、説明がつく。」というわけである。

現在、邪馬台国大和説論者たちは必至で纒向や箸墓の時代を古くしように見えるが、吉備邪馬台国東遷説ならほとんど無理はない。九州からでも吉備からでも臺與の時代が纒向遺跡は最も栄えているかのようだ。私は吉備邪馬台国が臺與の時代になって大和に東遷したとすれば、九州からの東遷で説明できない特殊器台や弧帯文の大和出土をよりうまく説明できると思った。

橿原考古学研究所の寺沢薫は、古墳時代を形成する諸要素を比較検討した結果、吉備が古墳時代形成に最も大きな役割を果たしたと述べた。その論考に沿ってさらに様々な研究が進み、2011 年国立歴史民俗博物館の春成秀爾教授は「卑弥呼は吉備出身だった」とまで言った。

近藤義郎は 2003 年の橿原考古学研究所の講演（『前方後円墳の起源を考える』近藤義郎著・青木書店 2005 年の中の論考「最古式前方後円墳を考える」）で、「倭の諸族による協議のなかで、特殊壺・特殊器

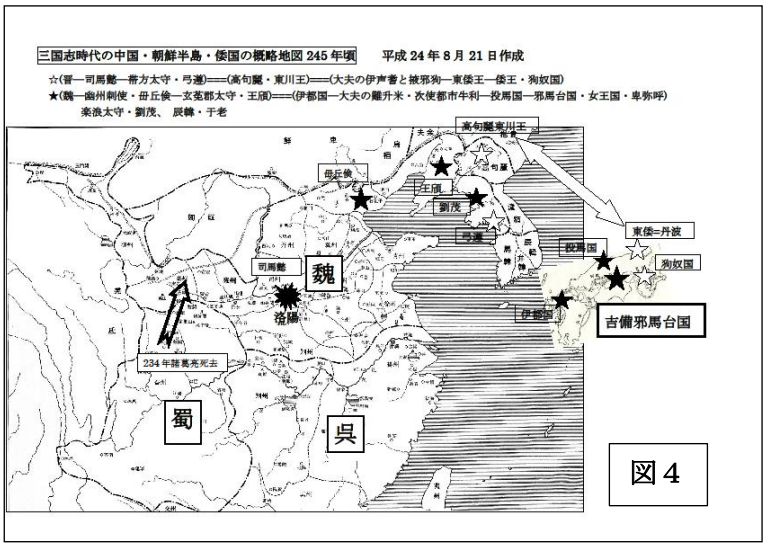
台という象徴的祭祀方式を創出して首長埋葬の呪的祭祀をひときわ盛大に行っていた吉備の、なかでも「備中族」の大首長が、備えもった絶大な呪的祭祀的政治性から、諸族の中枢の地位に擁立推戴され、大和に移動・進出したとするもので、諸族連合秩序の頂点を表現するかつてない規模の墳墓を、彼の死に前後して、奈良平野の東南方山麓に築造し、宮山型特殊壺・特殊器台をもって前方後円墳祭祀を創始した、とする考えである」と書く。これはまさしく吉備が邪馬台国ならば、吉備邪馬台国東遷説の考え方に近い。彼はまた「前方後円墳祭祀の根底には、吉備に発し後に埴輪祭祀として持続展開した特殊壺・特殊器台祭祀があったのである」とも書いている。

春成秀爾は平成 23 年読売新聞コラム（「卑弥呼は吉備出身か」・平成 23 年 3 月 2 日朝刊）において、弧帯文は人面龍身の文様であるとしたあと、箸墓の築造は２４０－２６０年であり、葬られているのは卑弥呼としたあと、当時龍神信仰が既に全国に広まっており、「龍も想像上の生き物であるから、人面龍身は龍と人が交わって生まれた神話上の産物である。人面龍身は吉備で見つかっているだけであるから、吉備の人たちはそのような神話をもっていたのであろう。」と書く。したがって弧帯文石については「弧帯石は人面龍身をさらに複雑化して立体的に表現したもので、吉備の大首長の祖先は龍であったことを示す証として造ったのであろう」と評価している。「龍を祖先とする吉備勢力の象徴物である特殊器台が、箸墓古墳の後円部のもつとも目につく位置に配置され、盛大な祭りを挙行したという事実の意味するところは重大である。これは卑弥呼の出身地が吉備地方であり、偉大な王の死にさいして吉備勢力が自らの象徴物を奉献したと考えるのが、考古学的にはもっとも自然ではないだろうか」と述べている。楯築の主は龍の子孫と言う思想が、大和の箸墓などの古墳祭祀に受け入れられたというわけだ。

吉備邪馬台国東遷説の提案

岡山大学出身の文献史学者・小林惠子（やすこ）は、独特の論理で古代史全体を通史で書いているが、なかなか魅力的な説が多く、ヒントになる事も多い。彼女は中国史についてはとにかく詳しく、たとえば三国志の主役の一人、蜀の諸葛孔明（しょかつこうめい）と戦った魏の司馬懿（しばい）が、孔明没後に遼東の公孫（こうそん）氏を攻めるとわかって、卑弥呼があわてて魏に使節を送る場面などの説明は、実に当を得ている。それまで邪馬台国卑弥呼は遼東の公孫氏を通じて中国と交易していたのだが、公孫氏が魏の皇帝・明帝の命令で幽州刺史・毌丘倹（かんきゅうけん）に攻められると今度は毌丘倹に接近していた。この毌丘倹は明帝の若いころからの側近であり、その後魏政権を簒奪する司馬懿とは対立していくのである。また卑弥呼が魏に使節を出したころから、新興国の高句麗が複雑な動きをして極東が大混乱していくことを鋭く指摘している。今までの邪馬台国論には公孫氏滅亡の動きはフォローしていても、高句麗の動きまではフォローできていない。高句麗は百済・新羅に先がけて建国し、約 100 年後の広開土王の時代には朝鮮から遼東を席巻し、倭国とも度々交戦するようだが、邪馬台国末期の高句麗の動きは注視して置く必要がある。そして高句麗はその後自立していない辰韓地域、のちの新羅と関係が深く、辰韓から倭国の東倭=丹波、投馬国=出雲とは海を隔てて直接交易できる範囲にある。

小林惠子は晋書に出てくる東倭という国を重視し、単に司馬懿と毌丘倹の対立だけでなく、これに朝鮮半島の高句麗などの諸勢力、倭国の邪馬台国・東倭・狗奴国の諸勢力が連動して対立していると見抜いている。（図 4 邪馬台国外交図　作図・岡將男）『魏志倭人伝』では 240 年の倭国の使節について「正治元年、［帯方］太守の弓遵（きゅうじゅん）は建中校尉の梯儁（ていしゅん）等を遣わし、詔書と印綬を奉じて倭國に至らしめ、倭王に拝仮した。並びに詔をもたらし、金、帛、錦罽、刀、鏡、采物を賜与した。倭王は使者に託して上表し恩詔に答謝した。」と書いている。



同じ 240 年の『晋書本紀』には「正始元年春正月、 東倭が通訳を重ねて貢物を納め、焉耆・危須の諸國、弱水より以南、鮮卑の名王も、皆な使者を遣わして獻上品を持参した。天子［曹芳］はその美徳を宰輔［宰相である司馬懿に］

に帰し、又宣帝・司馬懿の封邑を増した」
と、「東倭」が通訳を重ねてほかの国々と貢物を持ってやってきた、と書いてある。重要なのは『晋書』でも皇帝の経歴そのものを語る『本紀』に書いてあるということで、伝聞記事の多い『魏志倭人伝』に比べて公式記録をもとに書かれた信頼性が高い。「卑弥呼の倭国」以外に「東倭」も独自外交を司馬懿と行っていたというのが、小林惠子の主張である。私も三国志全体から考えて賛同したい。どの時代においても、力を持てば独自の外交をやろうとするのは当然の事。私は力をつけた「東倭=丹波」と「狗奴国=大和」が組んで独自交易路を確保し外交を行っていたと思う。

東倭と思われる国名は、朝鮮の歴史書『三国史記』にも出てくる。東川王 19 年条（高句麗本紀）「東海の人が美女を献じて後宮に入れた」高句麗から言えば東海とは日本海のことであり、日本海沿岸の国として「東倭」が有力候補となる。この年は 245 年にあたるから、丁度邪馬台国が狗奴国に攻められる 2 年前であり、上記の対立の図式から考えると、東倭が高句麗、司馬懿に政治工作をすることは何の不思議もない。そして東倭が大和の狗奴国と組んでいたら、なおさらだ。

東倭を「丹波」の政治勢力と考えた方が、邪馬台国吉備説に立ってもわかりやすい。当時の大和朝廷＝狗奴国は、『日本書紀』によれば「丹波」を征服はしていないものの、大陸との直接交渉のために、瀬戸内海ルートとは別ルートとして「丹波」から高句麗の交易ルートを確保したということではないか。

『三国史記』についても日本の文献史学、考古学の世界では、成立年代が遅いことから無視する傾向が強いが、一定の史実を語っている。『三国史記』は 1145 年に完成、全 50 巻で高麗 17 代仁宗の命により金富軾らが作成。三国時代（新羅・高句麗・百済）から統一新羅末期までの紀伝体の歴史書。

243 年（正始 4 年）の『魏志倭人伝』記事、「正始四年、倭王はまた使者である大夫・伊聲・、掖邪狗等八人を遣わし、生口（奴隷）・倭錦・絳青[糸兼]・緜衣・丹・木[犬付]・短弓矢を献上した。掖邪狗等は一に率善中郎將の印綬を拝す」

小林惠子によれば「女王」ではなく「倭王」と書いているから、実は「東倭」なのだと論じる。「復（また）」とあるから、今までは何の疑問もなく卑弥呼の 2 度目の使いだとするのだが、もし 240 年の使者があるなら東倭でも「復」ではある。伊聲耆、掖邪狗は東倭の使者名だというのである。さらに貢物の「短弓」というのはむしろ倭国というよりももっと北の物だともいう。掖邪狗は臺與が後継者となった最初の遣使の時に出てくる。小林説は、人間の対立というものをリアルに見ているということだろう。考古学的アプローチでは、経済は語れても、複雑な人間の心、権力欲、人の心の変化や裏切りは語れないということである。小林惠子の本を読んで私は「邪馬台国時代は三国志の時代である」という原則に立って、卑弥呼の魏への送使の流れを見ることにした。

『三国志』を書いた陳寿（ちんじゅ）は蜀漢の劉禅の時代、233 年（蜀の建康 11 年）に、益州（四川省）に生まれた。『三国志』は黄巾の乱から魏・蜀・呉の歴史を描いた、六十五巻にも及ぶ膨大な書籍である。我々が『魏志倭人伝』と呼んでいるものは、その中の『魏書』の部分の「巻三十　烏桓・鮮卑・東夷伝」の一部の「倭人の条」にすぎない。『三国志』の執筆には歴史的背景があり、また中国独特の世界観がある。なお『魏書』は『魏略』を元に編纂されたと言うが、『魏略』は逸文しか残っていない。

渡邉義浩は『魏志倭人伝の謎を解く・三国志から見る邪馬台国』（中公新書 2012 年）で『魏志倭人伝』の執筆意図を次のように説く。１．陳寿は呉討伐に対して積極派の立場で書いている　２．陳寿には晋の元祖・司馬懿の功績を宣揚する意図がある　３．中国の方一万里の原則によって書かれている　４．一大率を置く伊都国は倭国の首都圏にはない

「死せる孔明、生ける司馬懿を奔らす」との故事があるが、これは孔明の北伐に対抗して出陣した司馬懿の話である。晋の初代・武帝の祖父である司馬懿は、曹操存命中その能力を警戒されて、重用されることはなかったが、漢から禅譲を受けた魏の初代・文帝曹丕の「四友」すなわち側近として頭角を現した。227 年（太和元年）三代明帝から、都督荊豫二州諸軍事という対呉方面軍司令官に任命される。

蜀の諸葛孔明の第一次北伐の時の、対する魏の担当方面軍司令官は、曹操の甥の曹真であった。大将軍に任じられた曹真は、孔明が「泣いて馬謖（ばしょく）を切る」の故事で有名な、街亭の戦いに勝利するなどして、230 年には大司馬（軍事大臣）に任じられた。しかし渡邉氏によれば曹真の大司馬への昇進は、本当は西域の大月氏国を朝貢させて「親魏大月氏王」に封建した功績によるものが大きいという。いわゆる軍略上の「遠交近攻」であって、蜀の背後を脅かす大月氏国を味方にした事が評価されたというのだ。その後、倭国の卑弥呼が「親魏倭王」に任じられたのだが、実は「親魏〇王」というのはこの二つしかない。この事から卑弥呼と邪馬台国の存在が魏の国内問題、すなわち派閥抗争に利用されていたということがわかる。ところで陳寿はこの曹真の功績を曹真の列伝に挙げていない。なぜなら曹真の子・曹爽の

政敵は司馬懿だったからだと渡邉氏は言う。
単純に国とか氏族とかが一体化していると考えると、政治史を見誤ることになる。現代の政治でもそうだが、政治とは自己の利益の最大化を目指して、昨日の敵は今日の味方、今日の味方は明日の敵、と言う位に考えていかなければならない。従ってそういう政治史を語る我々も、したたかに考えていく必要がある。
さて曹真の病死後、司馬懿は抜擢されて対蜀方面軍司令官となる。司馬懿は国力のある魏としてはいたずらに動かず、持久戦に持ち込んで蜀の自滅を待つ作戦に出る。蜀から魏を目指す行路は山中の桟道などが多く難路であり、補給に難があった。しびれを切らした諸葛孔明は、司馬懿に婦人物の頭巾や衣服を送りつけて、司馬懿を怒らせ戦に持ち込もうとしたが、司馬懿は乗らなかった話は有名だ。
234 年孔明が第五次北伐で五丈原にやって来たとき、司馬懿は密偵を送り込んで諸葛孔明の周辺を探らせたところ、「寝食を忘れて仕事をしている」と報告を受けた。そこで司馬懿は「そんなに仕事をしたら衰弱して死も近かろう」と考えたという。案の定孔明はこの年陣中にて没した。司馬懿は諸葛孔明が死んだとの噂を聞き、試しに攻めてみたが、反撃されて「まだ孔明は生きている」と逃げたという。いわゆる「死せる孔明、生ける司馬懿を奔らす」の故事である。作戦の名人・丞相の諸葛孔明を相手にして、的確な読みで負けなかった司馬懿の功績は、もはや魏の中で誰も越せないものになっていたのだ。
渡邊氏の主張では、中国では国土の広さを方一万里とする世界観を持つという。邪馬台国まで帯方郡から万二千里といい、それぞれの里程を足し算して、邪馬台国の位置を論じることの危うさを、明確に示してくれている。中国の歴史書では 20 万人の大軍などという表現がよく出てくるが、実際は数千人であったりする。「嘘八百」という言葉の様に、数字は常に大げさなのである。万二千里とは単に遠いという意味かもしれない。
渡邊氏は佐伯有清の説に従って、伊都国に置かれた「一大率」は、交易を管理する「大倭」と対になる言葉で、「一人の大率」の意味だとする。また魏志倭人伝が一大率の役割を「倭国の内で刺史のようである」と書いているところから、一大率のいる伊都国は、倭国の首都圏にはないという。なぜなら後漢の首都圏以外には刺史が置かれ、首都圏では百官の監督権まで持つ「司隷校尉（しれいこうい）」が置かれていたのだ。
吉備邪馬台国東遷説の根幹の部分に入っていく。司馬懿が遼東半島の公孫氏を滅ぼすまで、倭国を含めた東夷諸国は、公孫氏を窓口に中国と交易していた。
184 年、黄巾の乱が勃発すると、公孫度は襄平（遼寧省遼陽市）で漢から自立した。魏・呉・蜀の三国鼎立（ていりつ）時代になっても、その外で公孫氏は自立して、魏・呉との外交を行っていた。その後、楽浪郡の南に帯方郡を設置。倭韓は帯方郡の公孫康に属する。おそらく卑弥呼の邪馬台国は頻繁に公孫氏と通商を行ったはずだし、中国本土の中原とは公孫氏勢力圏を通過しなければ交易はできなかったはずだ。逆に言えば公孫氏が自立できたのは、倭国を含めて朝鮮半島全域の交易による利益がなければできなかったという事でもある。
236 年司馬懿は、諸葛孔明が五丈原にて没して公孫氏討伐に向かう。幽州（北京付近）を自領とする呉は高句麗東川王との連合を模索するが、その思惑に反して高句麗東川王は使者を斬って魏に送る。高句麗は、海を隔てた呉との同盟より、この時点では魏との友好関係を選んだ。
237 年、魏の明帝は幽州刺史・毌丘倹に命じて、公孫淵を魏都に召還しようとするが、公孫淵は拒否して戦闘となる。公孫淵は毌丘倹に勝利し、燕王と自称して本格的に魏から自立を宣言した。ここで魏と公孫氏は断絶する。この時点で 12 月、景初二年 1 月、明帝は司馬懿に公孫淵討伐の詔勅を下した。
238 年（景初二年）5 月司馬懿。遼東に到着。蜀を破った司馬懿の業績は、既に朝鮮半島、倭国の国々の外交関係者の間では知られていただろうから、中国との交易の窓口である公孫氏政権が危ういことで動揺が走ったに間違いない。
『魏志倭人伝』では卑弥呼は、238 年（景初 2 年）6 月に魏に使者を送ったとなっている。「景初二年六月、倭の女王は大夫難升米等を遣わし郡に至らしめ、天子に詣りて朝獻することを求めてきた。太守劉夏は官吏を遣わし、ひきゐ送りて、京都に詣らしむ。」『日本書紀』が『魏書』のもとになった『魏略』を引用してあり、そこには景初 3 年となっている事から、卑弥呼の使者は景初 3 年であったというのが定説になっている。戦乱の遼東半島を横断して使者を派遣できるはずがないというわけだが、卑弥呼は司馬懿が登場したことから、公孫淵滅亡を予期して魏に使者を送ったと考えることもできるのではないか。それぐらい倭国も公孫氏との対立を注目し、情報も持っていたはずである。
238 年（景初二年）9 月、司馬懿は公孫淵を襄平で包囲し、父子を殺害。高句麗東川王は司馬懿に千人の救援を派遣。この時点で高句麗は司馬懿とは組んだものの、同じ魏の将軍・毌丘倹と後に戦うことに

なるのだから、魏の司馬懿と毌丘倹はこの頃から対立を始めていることになる。毌丘倹はその後、魏に対して反乱を起こしているのだ。

238 年 11 月、明帝は卑弥呼に詔書をもって「親魏倭王卑弥呼」と金印紫綬を仮授、大夫難升米を卒善中郎将、次使都市牛利を卒善校尉に任じ、銀印青綬を仮授。

9 月に公孫氏が滅び、いち早く 11 月には親魏倭王に任命したという方が、わかりやすいようにも思う。ところが 12 月、 魏の明帝が死去。政権の実権は蜀だけでなく公孫氏を滅ぼした司馬懿に移り始める。邪馬台国連合や狗奴国、あるいは出雲・丹後等諸国の外交はまたまた混乱したはずである。権力を失いつつある魏の朝廷につくか、それとも蜀だけでなく公孫氏を下した実力者の司馬懿につくかである。

240 年（正始元年）正月東倭が晋に朝貢（『晋書』宣帝紀正始元年）

242 年、高句麗東川王、鴨緑江下流の西安平（丹東市東北）を攻める

243 年正始 4 年倭王は（帯方郡太守弓遵を通じて）大夫の伊声耆と掖邪狗ら 8 人を遣わし生口・倭錦・絳青縑・布帛・丹・短弓矢を献上、掖邪狗らは卒善中郎将と印綬を拝した。この頃、極東では毌丘倹と高句麗東川王が熾烈な戦闘中。司馬懿が公孫氏を滅ぼすとき、高句麗東川王は援軍を出しているが、幽州刺史毌丘倹は東川王と戦っている。

243 年 12 月 、倭の女王卑弥呼が（魏の毌丘倹を通じて）魏に使者を遣わして献上品を奉じた。このあたりから、公孫氏滅亡後の商業利権をめぐって、遼東や韓半島での抗争が続くようになる。建国したばかりの高句麗の動きが激しく、倭国も大きな影響を受けたはずなのである。

245 年 3 月、『三国史記』（「高句麗本紀」）「東海（日本海）地方の人が、美女を献上したので、王はこれを後宮に入れた」。東倭は東川王に美女だけでなく援軍も送ったのではないか。

245 年、『魏志倭人伝』に「倭に詔を賜り、難升米に黄幢が郡（王頎）に付して仮授された」。『魏志倭人伝』は王頎が毌丘倹のために邪馬台国と連絡を取って、連携を図った。難升米に黄色い旗を与えたということは、軍を動かす将軍という意味でもある。

245 年 10 月 、東川王、辰韓(毌丘倹側)の北辺を攻撃。（「高句麗本紀」）

246 年8 月、幽州刺史の（長官）の毌丘倹は玄菟郡太守・王頎と兵 1 万で高句麗攻略。冬 10 月毌丘倹は丸都城を攻略、王頎に東川王を追撃させ、東川王は竹嶺に南下、買溝の北沃祖に逃亡、王頎軍は追跡し記念碑を残す。（高句麗本紀）

247 年 2 月東川王は南平壌を去り、辰韓の于老を破り、南平壌（長寿山城）に城をつくる。

247 年（正始 8 年）王頎が帯方郡太守に着任。(帯方郡太守・弓遵殺害の結果の就任)王頎は遼東半島土着の漢人。

公孫氏滅亡後の交易権を巡って、司馬懿、毌丘倹、高句麗東川王、辰韓などの複雑な外交的駆け引きと交戦が続く中で、倭の女王と狗奴国が交戦したわけで、載斯・烏越等が帯方郡・王毅の所に来て報告をし、王毅は塞曹掾史の張政等らを倭国に派遣して、詔書と黄幢を仮に拝受した難升米に檄文で教示することになる。遼東半島から朝鮮半島にかけての、この動乱を背景として、狗奴国が攻勢に出、邪馬台国がピンチになるというのは、大いにありえることである。（図 5 邪馬台国東遷説・張政の行路図）

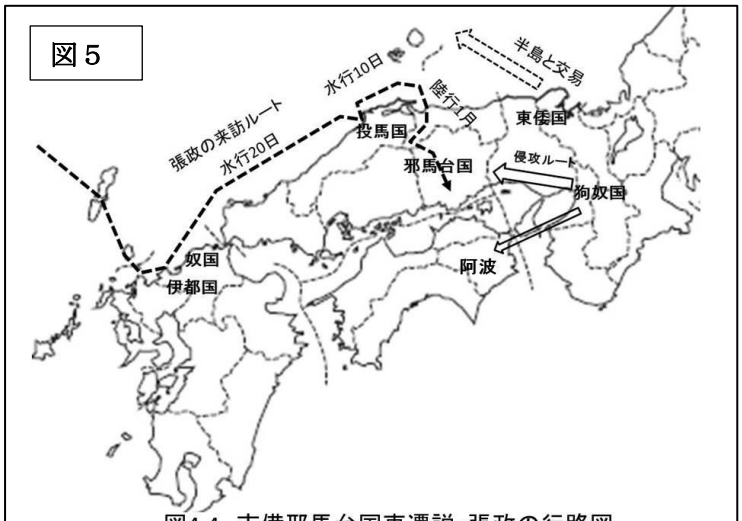


図4-4 吉備邪馬台国東遷説･張政の行路図

247 年（正始 8 年）『魏志倭人伝』では「其八年、帯方太守の王頎が官に赴任した。倭女王卑彌呼は狗奴國の男王・卑彌弓呼と元々不和であった。そこで倭の載斯と烏越等を派遣して、帯方郡に至り、邪馬台国と狗奴国が相攻撃している状態を説かせた。帯方郡は塞曹掾史・張政等を遣わして因って詔書、黄幢をもたらし、難升米に拝仮し檄文を作って之に告諭した。」とある。卑弥呼の使者が帯方郡に到着したのは、帯方太守の弓遵が戦乱で殺され、新任の太守王頎が帯方に到着した時であった。おそらく高句麗東川王の背後に東倭・狗奴国がいるとみて、帯方郡太守王頎は張政を派遣したのであろう。張政は長城

守備隊の曹掾史であって、地位は低いがおそらくは戦略家・軍略家としての実力を期待されて倭国に派遣されたのだと思う。

渡邉義浩は『魏志倭人伝の謎を解く』で、『冊府元亀』巻九百六十八外臣部朝貢第一部に、「八年、倭国の女王である壹与(とよ)は、大夫掖邪狗たちを派遣して（洛陽）の尚書台に至らせ、男女の生口三十人を献上し、白珠を五千枚・青大句珠を二枚・異文雑錦を二十匹、朝貢した」と書いてある事を指摘、張政はその年の内に帯方郡に凱旋したことがわかる。以下に述べる張政の功績は短時間に成し遂げられた。

森浩一氏は『倭人伝を読みなおす』において、朝鮮総督府が調査編集した『朝鮮古跡図譜第一冊』（大正４年刊行）に、帯方郡治の北８ｋｍの方墳から､「使君帯方太守張撫夷塼」と書いた塼(煉瓦)が出土していると指摘している。夷を鎮撫するという意味において､「ぼくが述べてきた張政の倭地での役割に撫夷はぴったりである」と書いている。この古墳の年代は288年ごろとみられ、若き張政が倭国統一の手柄を上げ、壮年になって帯方郡太守に出世し、名前もふさわしく改めたのではないかという。私もこの意見に従いたい。張政は帯方太守として引き続き倭国に影響力を行使していたのではないだろうか。

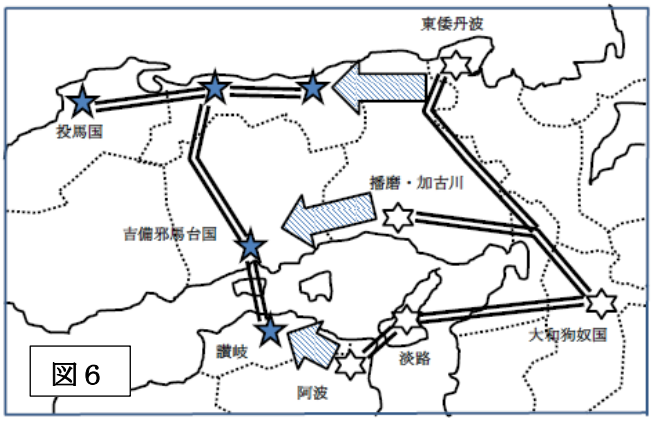


図６

漢文では「以～」は「〇〇の理由によって××となる」と読む。『魏志倭人伝』の「為檄告喩之卑弥呼以死大作冢」の部分は今まで「卑弥呼が死んだので大いに冢を作った」と理解され、大きな冢なのだから箸墓古墳が卑弥呼の墓に違いない、と邪馬台国大和説の大きな根拠とされたのである。「以て死す」を「既に死んでいたので」と訳する場合もある。

しかし直前の「為檄告喩之」に着目して、「来朝した郡使が檄をつくって難升米に告げ喩した結果、卑弥呼が死亡した」と読んだのは、阿部秀雄氏である。森浩一氏もこの意見に賛同していたが、岡本健一氏は、『蓬莱山と扶桑樹』（思文閣出版 2008 年）において、中国の歴史書の中での「以死」の用例を調査した結果、合計 761 例あった。「自然死ではない。刑死や賜死・諫死・戦死・自死・遭難・殉職・奔命(過労死)・事故死などで、その結果、非業の死を遂げたものばかり」と書いている。

さて卑弥呼の場合はどうだったのだろうか。既に狗奴国との戦争状態は深刻と報告され、難升米には魏の皇帝からの詔と、軍旗としての黄幢(黄色い旗)も与えられている。帯方郡太守王毅は倭国に関して、張政に全権委任したではないか。政治軍事顧問以上の権限を与えられた張政を受け入れる邪馬台国側にしても、軍事的には追い込まれていたので、狗奴国との講和を望んだはず。また張政側には狗奴国とのパイプがあったはず。そして倭国の軍事権は黄幢を持つ難升米にあった。

吉備に到着した張政はさっそく難升米を含めた現地司令官たちと協議。張政は別パイプを使って狗奴国との交渉をスタート。大事なのは、邪馬台国の連合政権的性格を考慮しておくことである。吉備邪馬台国と狗奴国の間にある、直接の戦場たる播磨、讃岐、大国投馬国などの意向も無視できまい。

第一次講和条件のポイントは以下の２点

１．卑弥呼の引退　　２．次の倭国王を誰にするか

卑弥呼に引退を迫る「檄」、これはかなり激しい言葉であったはず。卑弥呼にとっては政治的・祭祀的死刑宣告であった。卑弥呼は既にかなりの高齢、自分の存在価値の終りを知って、悄然として死を選んだであろう。高齢とはいえ卑弥呼の死は急死である。その年の内に張政が帰国するまでの短期間に「大作冢」、つまり大きな塚を作ったとはとても考えられない。箸墓規模の築造は１年や２年ではできず、従って箸墓は卑弥呼の墓ではないと思う。

卑弥呼が亡くなったあと、魏志倭人伝には「さらに男王を立てるも国中服さず、さらに相誅殺して当時千人を殺す。」とある。（図６対立模式図）

この段階、すなわち第一次講和の男王の候補としては、

１．邪馬台国大夫・将軍・難升米、２．狗奴国王・卑弥弓呼、３．狗奴国将軍・吉備津彦

４．卑弥呼の一族の男性

などが考えられる。

ただ『魏志倭人伝』の文脈を見直すと、狗奴国王の名前が出た後すぐに卑弥呼が死ぬ。どうも男王は

卑弥弓呼と言っているみたいなのだ。張政は魏本国や帯方郡の政治を考慮して卑弥弓呼を男王、すなわち倭王に指名したのだろう。しかしこの後倭国内では当時千人が死ぬという混乱が起こる。温羅伝説などもこの時のことを書いたのではないか。第二次講和を模索する張政、難升米、吉備津彦としては、邪馬台国構成諸国の経済的利権に配慮しつつ、狗奴国側にも応分に経済的利益を与えなければならない。

この段階で卑弥呼の宗女臺與の存在がクローズアップされてくる。卑弥呼の親族として、若き卑弥呼を彷彿させるものがあったはず。さらに予知能力など巫女としての才能も既に開花していたのではないか。邪馬台国吉備説の広畠輝治氏は、讃岐の一宮田村神社の祭神にヤマトトトビモモソヒメがあることから、臺與は讃岐出身ではないかと看破している。私もそれに従いたい。卑弥呼のもとに一時はいたかもしれないが、讃岐において一定の巫女としての実績があったのではないかと思う。吉備津彦とヤマトトビモモソヒメの関係、姉弟という『日本書紀』『古事記』の系譜を考えると、卑弥呼側と接触するうちに吉備津彦は臺與の存在を知り、第二次講和において臺與を推薦したのは逆に狗奴国側の吉備津彦だったと思う。

第二次講和条件のポイントは以下の２点だと思う。

１．卑弥呼の宗女臺與を邪馬台国王・倭王とする

２．臺與は邪馬台国の都を、狗奴国王都のある纒向に移す

張政の調整で、邪馬台国側と狗奴国側ともにこの講和条件でまとまったが、臺與（とよ）を纒向（まきむく）に連れて行くということは、一見拉致されるようにも見える。なんとか臺與を説得し、吉備王宮の大和纒向移転を「神託があった」などとして実行必要しなければならない。

「また卑弥呼の宗女臺與、年十三を王となし、国中遂に定まる。張政らは檄を以って臺與に告諭す」

１３歳の臺與を王にすることによって、はじめて国中が安定したというのだが、ここでまた「檄」が出てくる。「政等」とは張政だけでなく難升米、吉備津彦などの大人たちであり、彼らの決定を臺與に飲ませるべく「檄」をもって告げ諭すわけである。吉備津彦は邪馬台国である吉備に進駐、一方臺與は倭国王として狗奴国首都の纒向に迎え入れられた。倭国は安定し、戦争は終わり、短期間に成果を上げた張政は帯方郡に凱旋できたのである。

邪馬台国王家の紋章・弧帯文を持った特殊器台が大和の初期古墳に出てくる事実、これが臺與による邪馬台国王都の遷都の間接的証明であり、またこうでなければ突然に大和で特殊器台が出現することを説明できない。したがって私は必然的に、箸墓は臺與の墓だという結論になる。

大和に移った臺與はその生存中は「邪馬台国女王・倭国王・臺與」でありつづけ、倭国を代表して祭祀をつかさどる。外交的には臺與は倭国王であり続けたが、もちろん政治的経済的実権は狗奴国に移った。後に述べるが、大和朝廷の商人的性格を表している。

纒向遺跡内で弧帯文を描いたものが出てきたり、祭祀に使ったとみられる大量の桃の種や大神殿跡と思われる建物が出てきたりするが、これらは卑弥呼の邪馬台国を継承した臺與が祭祀をしていた痕跡かもしれない。寺沢薫は「前方後円墳の原型が楯築墳丘墓に求められる以上、そのキャスティングボードを握ったのは「キビ国」だった。イニシアティブはキビ国連合とその息のかかった中・東部の瀬戸内地域が握っていた、というのが私の考えだ。」（『王権誕生』寺沢薫著・講談社 2008 年）と書く。吉備邪馬台国東遷説なら、これを十分に矛盾なく説明できるはずである。

ともかく国内の政治経済的実権は、狗奴国すなわち神武以来のいわゆる大和朝廷に移った。戦後一貫しての邪馬台国ブームの元、「卑弥呼をいじめた憎っくき狗奴国が、大和朝廷であってはならない」といった、誰も意識しない新しい皇国史観が、我々の中にあったのかもしれない。だが初期大和王権の性格を検討すれば、彼らは実に商人的であり、合理的思考を行うのだ。

では卑弥呼の墓は吉備のどこにあるのだろうか。現状では鯉喰神社墳丘墓の可能性があるものの、まだ発見されていない、あるいは既に破壊された墳丘墓がある可能性もある。

邪馬台国が東遷した結果としての統一倭国として、巨大な箸墓を築くことは十分可能である。

第１　平和　　第２　纒向の経済力の集積による富。

狗奴国は既に弥生後期には丹波を仲介する大陸との交易、近江・尾張を仲介する北陸や関東との交易を通じて、巨大な富を集積しつつあり、平和になれば富は急速に増大したはずである。

狗奴国王墓としての纒向型前方後円墳をベースに、吉備の造墓技術をプラスしてできたのが、最初の巨大古墳・箸墓なのではないか。纒向型前方後円墳の時代に邪馬台国狗奴国の統合がなり、邪馬台国王家の紋章である弧帯文は狗奴国の纒向に受け入れられている。時代が変わったモニュメントとして箸墓は築かれ、そのビジュアルさを民衆に指し示すものであったのではないか。箸墓は「平和の象徴、倭国

統合の象徴としてのモニュメント」だったのである。
　臺與には子がなく、倭国連合政権は、旧狗奴国政権になっていく。だから大和朝廷の歴史書には倭国統合の事実が隠されたとしか思えない。しかし『日本書紀』では臺與の呪術的能力、箸墓築造の事実だけは残し、臺與を招聘した吉備津彦の姉・倭迹迹日百襲姫命として処遇したのであろう。
　それでは臺與はどうして箸墓の築造を決意したのだろうか。ヒントは意外にも身近な『晋書』巻三武帝紀にあった。「（泰始二年）十一月己卯、倭人が来て貢物を献上した。（漢の儒教を集大成した鄭玄の説に基づいて天を祀る場所としていた）圜丘・（地を祀る場所としていた）方丘を（武帝の祖父である王粛の説に基づき、天を祀る）南郊・（地を祀る）北郊に合わせ、二至（夏至と冬至）の祭祀を二郊（南郊と北郊）に合わせた。」
　この記事については 266 年に倭人が貢物を持ってきたのは臺與だろうとの推測だけが論じられているが、実はその直後に圜丘・方丘の儀式の変更について語っているのである。本紀に書いてあることも注目に値する。箸墓築造とこの記事は関係があるかもしれない。現在発掘されている纒向遺跡はこの時期に急速に発達し、王宮も作られただろう。纒向遺跡の神殿らしき建物はおそらく臺與の時代の物だろう。臺與＝倭迹迹日百襲姫命であることを証明することはかなり難しいが、実は大和には倭迹迹日百襲姫命を祀る式内社はないのに、岡山では吉備津神社、吉備津彦神社、岡山市中心部の岡山神社に祭られている。また讃岐では一宮の田村神社、東かがわ市の水主神社にも祀られている。この事も頭にはおいておきたい。
　次に卑弥呼の王宮はどこにあったただろうか、考えてみたい。倉敷美観地区の真ん中にある倉敷考古館には不思議な、他に例の無い「仮称・家形特殊器台」が現存する。楯築に近い「女男岩遺跡」から出てきた遺物である。特殊器台がこれだけ注目され、邪馬台国論争や箸墓の評価に大きな影響を与えているというのに、この土器の評価どころか、ほとんど紹介もされていないのは不思議である。私はこの「家形特殊器台」は卑弥呼の王宮の主殿を模したものだと思う。吉備邪馬台国が政治的、経済的に優位に立てたのは、「瀬戸内に面した交易港＝上東遺跡」、「豊かな農業生産力＝楯築周辺の巨大集落」が大きな要素であり、王宮の所在地としては楯築を含む矢部から加茂の造山古墳周辺までが第一候補、第二候補は楯築の丘と吉備中山の間の大規模遺跡群、第三候補は吉備津神社周辺を含む吉備中山西麓を考えたい。

阿波・丹波・讃岐・播磨、神武東征、投馬国について

　邪馬台国と狗奴国の戦いは、実質的には経済戦争であり、交易権争いであったはずで、当然のことながら朝鮮半島、中国との交易路すべてに及ぶ戦いであったはずだ。しかし直接の戦争の舞台は、吉備、播磨、四国側の讃岐などにも及んだのではないか。吉備邪馬台国経済圏と大和狗奴国経済圏が接するところである。
讃岐　讃岐一宮の田村神社には倭迹迹日百襲姫命が祀られており、吉備の弧帯文も讃岐で出土している。発見されている。高松市街地の南にある石清尾山にある双方中円墳の猫塚などは、全体が積石塚になっており、特異な存在である。
阿波　阿波の鳴門、萩原１号墳・２号墳については、大和のホケノ山古墳の先行的事例としての評価があるが、一方で吉備と阿波の関係を示すものも多い。阿波では吉備独自の分銅形土製品が出土している。弧帯文も出土。阿波の特産品といえば、阿南市の若杉山遺跡が天然水銀朱の原石である「辰砂」の採掘・精製で全国的にも重要な存在として知られている。邪馬台国の卑弥呼が朱を好み、魏志倭人伝でも魏からの贈り物に朱が入っている。楯築遺跡でも大量の朱が用いられているが、吉備邪馬台国が阿波の朱の交易権を持っていたとしたら、その交易拠点たる矢野遺跡などに弧帯文が入っているのは当然かもしれない。私は朱の交易権争いが吉備邪馬台国、大和狗奴国の戦争の原因の一つだと考えている。
播磨　大和から吉備津彦が陸路で吉備に向かうには、当然播磨を通らなければならない。加古川から山陰に抜けるルートは、中国山地で最も標高の低いところがあり、丹波に抜けるルートは交通がしやすいという利点がある。吉備津彦が加古川を前進基地にするには、丹波・丹後勢力の協力あるいは黙認が必要だったと思われる。
丹波　丹波・丹後・但馬は総称して「丹波」であった。私はこれが『晋書』に出てくる東倭だと思う。吉備邪馬台国東遷説を語るうえで、「丹波」をどう考えるかは非常に重要であった。「丹波」は大国で、三国に分割されているが、その勢力は若狭や摂津・播磨にも及んでいるようだ。弥生墳丘墓を見てみると、出雲・伯耆・因幡に集中的にみられる四隅突出墓を「丹波」は採用していない。
　邪馬台国と狗奴国の戦闘が激化する頃の年号を持つ鏡が、近畿に多い所から、邪馬台国は大和だと推

論する意見も多いが、実は「丹波」の独立勢力を認めると、むしろこれらの鏡は「丹波」を中心として配布されるかのような分布になることは、注目に値する。朝鮮の歴史書『三国史記』「新羅本紀・脱解尼師今紀」では、「脱解はむかし多婆那国で生まれた。その国は倭国の東北一千里のところにある。」「多婆那国」が「丹波」であり、倭国の東北一千里にあるということは、逆に言えば「丹波」の南西千里に倭国があり、しかも女人国というのが女王国を象徴するとしたらどうだろう。

神武東征

狗奴国=大和朝廷と考えるには、神武東征をどう考えるかが重要だ。浅井荘一郎は『古代製鉄物語「葦原中津国」の謎』（彩流社,2008 年）において、神武天皇は湖沼鉄からの製鉄技術を持つ、日向の鍛冶業者であったとする。神武天皇は弁辰（朝鮮半島南部の弁韓・辰韓あたり）製鉄集団の出身であり、中国南部から伝わった湖沼鉄製鉄技術を吸収し、九州の日向の佐野を出発して北九州、安芸、吉備を経由して宇陀の水銀をめざし、最終的には、先行して大和に入っていた天孫族のニギハヤヒ製鉄集団を吸収し、大和朝廷となったというのだ。私はその説に概略賛成する。

私は一定の湖沼鉄利用技術、製鉄やベンガラ生産能力を持った神武一族が、資源を求めて移動したのだと思う。その規模は数十人。最新の武器で武装し、軍略を持ったブレーンを持ち、船を操る技術を持っている集団だ。いわば武装鉱山事業商人が神武の本当の姿ではないか。だから戦争しなくていい相手なら、おもねってでも仲良くし、協調するし、物で釣れるなら懐柔も厭わない。人数が少ないからなるべく自軍の消耗を少なくしなければならない。葦原の多そうな土地を経由しているのは、湖沼鉄の原料を求めたからだ。そこでは戦争らしい戦争はしていない。特に吉備では３年から８年滞在して軍備を整えたというが、それはいわば吉備邪馬台国をスポンサーにして、経済力を蓄え、大和へ向かった。

吉備の高島の宮は、旭川東岸の百間川遺跡群周辺の大集落の可能性が高い。吉備の穴海は遠浅で近辺に葦原も多いのだから、湖沼鉄製鉄をしながら日銭を稼ぐには絶好の地だったろう。残念ながら湖沼鉄製鉄では、大規模な炉は必要としないから、遺跡も残りにくいはず。

神武東征の時期は西暦 100 年頃、倭国誕生の頃で、すでに阿波の水銀朱は吉備で知られていただろうから、水銀朱鉱脈を確保する方が、利益が高いことを知った。吉備から阿波の水銀朱の交易ルートを調査し、大和の奥の宇陀に有力な水銀朱鉱脈があることを知り、大和まで東征したのではないか。

当初は吉備邪馬台国とは対立はせず、むしろ水銀朱の売り手として交易していた狗奴国は、次第に経済力を蓄え、東倭=丹波と組んで大陸の公孫氏や高句麗とも交易をしていたのではないか。やがて倭国大乱を経て卑弥呼が共立されたころから、邪馬台国を盟主とする倭国との経済対立が激化し、吉備津彦の吉備制圧につながっていくのではないか。

投馬国

私は四隅突出型墳丘墓文化圏を『魏志倭人伝』の投馬国と考えている。その中心地はやはり西谷三号墓のある出雲市近辺であろう。『魏志倭人伝』には九州から邪馬台国への道程を「南に投馬国に至るには水行二十日、官は彌彌、副は彌彌那利といい、五万余戸ほどか。南に邪馬壹国の女王の都に至るには、水行十日陸行一ケ月。官には伊支馬があり、次を彌馬升といい、その次が彌馬獲支、その次が奴佳鞮という。七万余戸ほどか。」と書いてある。

投馬国へは倭国政権の重要拠点・伊都国から航海したと考えた方がいい。方位論についてはここでは省略するが、南は東である。水行二十日で五万戸とすれば、日本海を航海して出雲あたりが投馬国としても差支えがない。そこからさらに水行十日で妻木晩田遺跡あたりにたどり着く。妻木晩田遺跡から陸行一ケ月で吉備邪馬台国中枢の楯築遺跡周辺に到るというのも、適当な線だろう。特殊器台は岡山県と鳥取県の県境に近い新庄村あたりや真庭盆地、津山盆地、新見盆地でも出ているのだから、この時代の山陽山陰の通行路は複数存在したはずである。なぜ吉備邪馬台国へのルートが瀬戸内海を通っていないのかも考えてみたいと思う。

１．魏の使者がたまたま日本海ルートを通った
２．魏の使者は途中で投馬国に寄る必要があった
３．政治情勢から瀬戸内海ルートは選択できなかった、狗奴国がルートを制圧していた

等が考えうる。また瀬戸内海ルートは島が多く、潮流が複雑なので、意外に日本海ルートの方が安全だったかもしれない。魏の張政が政治的調停を行うなら、邪馬台国連合内の大国・投馬国を訪れる必要はあったかもしれない。東倭＝「丹波」との直接の折衝は妻木晩田遺跡あたりで行われたかもしれない。張政はたまたまでなく倭国統一のためには日本海ルートを通る必要があったと考えたい。